

一 般 演 題

1. CA 130 IRMA kit の使用経験

金森 勇雄 奥村 恭己 高木 等
樋口ちづ子 (大垣市民病院・放技)
中野 哲 武田 功 熊田 卓
杉山 恵一 (同・消化器)

腫瘍マーカー CA 130 の IRMA キットの基礎的検討を行った。

標準曲線の C.V. は 2.5~15.6%, 同時再現性は 2.1~3.5%, 日差再現性は 3.0~6.1%, 回収率は 94.8~98.3%, 希釈曲線は良好で、いずれもほぼ満足すべき結果であった。

CA 130 と CA 125 の相関は $r=0.985$ ($p<0.001$, $n:141$) であるが, SCC, CA 72-4, CA 19-9, CEA, AFP とには相関関係を認めなかった。

月経周期, 閉経前後で CA 130 値は変動するが, 卵巣癌 74% (37/50), 乳癌 77.7% (7/9), 胃癌 71.0% (15/21), 肺癌 55.6% (10/18), 結腸癌 50% (5/10) の陽性率であった。

今後は症例を加えて, 腫瘍マーカーとしての利用方法を検討する必要があると考える。

2. マクロオートラジオグラフィによる放射性金属元素の悪性腫瘍組織内分布の観察

安東 醇 安東 逸子 真田 茂
平木辰之助 (金沢大・医短)
久田 欣一 (同・核)

^{67}Ga -citrate, ^{169}Yb -citrate, ^{201}Tl -chloride など 17 種の放射性金属化合物をおのおの吉田肉腫皮下移植ラットおよびエールリッヒ癌皮下移植マウスに投与した。3~48 時間後に腫瘍組織を摘出し, すでに述べた方法によりマクロオートラジオグラフィと H.E. 染色切片を作成し, 金属元素の組織内分布状態を観察した。①腫瘍細胞の生きている部分, ②同壊死の部分, ③周辺の炎症部分等に分けて金属元素の集積を調べた。その結果, ①に多く集積するもの (^{201}Tl , ^{86}Rb など), ②に多く集積するもの (^{22}Na), ③に非常に多く集積するもの (^{95}Zr , ^{182}Ta など)

があり, 元素の種類により分布状態が非常に異なった。これを取りまとめ, 元素の性質と腫瘍組織内分布の関連について報告した。

3. 一次性および二次性肥満患者の全身および局所骨塩量の測定 (第 1 報)

清水 正司 瀬戸 光 蔭山 昌成
野村 邦紀 萬葉 泰久 渡辺 直人
亀井 哲也 二谷 立介 柿下 正雄
(富山医大・放)
加藤 弘巳 (同・一内)

DEXA 法により一次性および二次性肥満患者の局所および全身の骨塩量を測定し肥満との関係を検討した結果, 男性の一次性肥満では体重と全身骨塩量 ($r=0.85$, $p<0.01$) および下肢骨塩量 ($r=0.82$, $p<0.01$) に相関があった。

肥満では骨格に対する機械的負荷の増加のため全身骨塩量が増加しており, 各部位の中でも特に下肢骨塩量が増加しているのは, 負荷がより多くかかっているためであると考えられた。

4. 腎障害を伴ったカドミウム汚染地域住民の全身骨塩量と血中ビタミン D₃ 濃度

蔭山 昌成 瀬戸 光 清水 正司
野村 邦紀 渡辺 直人 亀井 哲也
二谷 立介 柿下 正雄 (富山医大・放)
青島 恵子 (同・公衛)

β_2 ミクログロブリンクリアランスが 10% 以上のカドミウム汚染地域住民 26 名を対象に, DEXA 法による腰椎骨密度, 全身骨塩量を測定し, 正常者と比較するとともに, 血中ビタミン D₃ 濃度との比較を行った。本対象群では, 正常者に比べ明らかな腰椎骨密度, 全身骨塩量の減少を認めた。この傾向は, 特に女性において顕著であった。また, 血中ビタミン D₃ 濃度との比較では, 身長で補正した全身骨塩量と, 24,25(OH)₂ Vit. D₃ との間に有意な相関が認められた ($r=0.41$, $p<0.05$)。現在, 24,25(OH)₂ Vit. D₃ の生理学的意義については, 一定